第4回 忘れられない看護エピソード
優秀賞
一般部門

最後のおやつ

【槙（まき） 尚子（ひさこ）・東京都】

無類の甘党だった母は和菓子が大好物だった。人生最後の食べ物は何がいいかと家族で盛り上がったことがあった。焼き肉やおすしなどが出た後で、母は「あんこ」と言った。もう臨終のそんな時にはあんこなど欲しがらないだろうとみんなは言ったが、母は、「口を開けてあんこを入れてくれればそれでいいの」と言い張った。

それから何年もたった。6人もいた家族が、母と私の2人家族になった。静かになったわが家で母は昼間は1人だった。お菓子というものは、誰かがいてこそ楽しく食べられるものらしい。1人で過ごす日中にいろいろとお菓子をそろえておいたが、年老いた母はめったに手を付けなかった。その代わり夕食が終わると、「さあ、お茶にしましょう」と私を促した。お茶とお菓子、これが2人の夕食後のぜいたくなひと時となった。

母の最期の場所は病院だった。10回の入退院を繰り返した母はようやく武蔵野の静かな地を与えられ、最晩年を過ごしていた。長くないことは誰の目にも明らかだった。すでに食事はできなくなり、点滴だけで生きていた。ある日、看護師さんに「お母さんのお好きなものを食べさせてあげませんか」と言われた。「分かりました。明日持ってきます」と私が用意したのは、水ようかんだった。

母はすでに息と食べ物を区別できなくなっていたので、口に固形物を入れることは大きな冒険だった。しかしいいではないか。あんなに好きだったものをほんの少し舌の上に乗せてあげるだけではないか。水ようかんを崩して崩して耳かきひとさじ分、舌の上に乗せてみた。母は何とも言えない顔をした。それまでうつろだった目で、じっと私を見た。

母は何にも言わなかった。黙って私を見ていた。誤嚥（ごえん）は起こさなかった。

人生最後の食べ物。それは水ようかんだった。それから半月後、母は天国へと旅立っていった。